

研究チーム報告 「グローバル化における歴史認識の方法」

戦後歴史学と「大きな歴史像」の可能性

P. コーフィールド教授の歴史認識論によせて

道重 一郎*

1. はじめに

平成19年度東洋大学人間科学総合研究所では、所長の岡本充弘文学部教授を研究代表者とする「グローバル化における歴史認識の方法」と題した研究チームによる共同研究を実施した。この共同研究は、歴史認識の細分化と多様化という状況のなかで、いかなる研究の方向性が可能であるかを模索しようとするものである。今年度、共同研究の一部として、2007年5月23日に来日中のロンドン大学ロイヤルホロウエー校歴史学教授ペニー・コーフィールド氏を迎え、「大きな歴史像への回帰」The Return to Big Historyと題された講演会を開催した。本小論は同教授の講演が、欧米及び日本の歴史認識における20世紀後半の推移のなかで、どのように位置づけられるかを検証しようとするものである。

ロンドン大学歴史研究所(IHR)では、2001年11月14・15日の両日、E. H.カーの『歴史とは何か』出版40周年にちなんで「いま歴史とは何か」と題したシンポジウムが開催され、翌年その成果が刊行された¹。一方、日本では2002年11月9・10日の2日にわたって史学会第100回大会を記念した、「歴史学の最前線」と題した国際シンポジウムが開催され、その成果も2004年に刊行された²。21世紀の初頭にあたって、歴史研究の現在を問おうとする内容のシンポジウムが期せずしてほぼ同時期にユーラシア大陸の両端で実施されたことはきわめて興味深いことであり、両地域の置かれた歴史学の状況のある類似性を示唆したものともいえるかもしれない。20世紀後半において支配的であった歴史学の方法や歴史認識に対する挑戦に一区切りがつき、これを整理して新たな方向性を探ろうとする段階に入ったことの現れであるように思われる。

¹ D. キャンダイン編(平田雅博ほか訳)『いま歴史とは何か』(ミネルヴァ書房、2005年。原著は2002年)

² 史学会編『歴史学の最前線』(東京大学出版会、2004年)

今回のコーフィールド教授の講演も、主として欧米のこうした状況を踏まえておこなわれたものである。そこでこの講演の意味を考えまた位置づけをおこなうために、20世紀後半の歴史研究が欧米と日本とではどのような経緯をたどったのかについて振り返る必要がある。以下では、まず英語圏を中心とする歴史研究の動向、続いて日本の歴史学の状況がどのようなものであったかを簡単に整理し、コーフィールド教授の講演内容を要約した上で、最後にその意味を検討してみたい。

2. 欧米における歴史認識の変化

E. H.カーが『歴史とは何か』を書いた1960年代において、すでに19世紀的な意味での客観的歴史、確実な事実の存在とその追求という考え方は過去のものとなっていた。カー自身が歴史的事実とは、歴史家によって実際に起こった出来事のなかから、意味があるものとして選び取られ限定されたものであり、また残存している歴史資料はある観点で残された史料に過ぎないと考えていた³。多くの人がルビコン川を渡ったのだが、歴史家は紀元前49年にシーザーが渡河したことのみを問題にするのである。つまり歴史的事実が歴史家によって捜し当てられるのを静かに待っており、時間がかかるかもしれないがいずれその全貌が歴史家の手によって明らかになるという歴史観はすでに過去のものとなっていた。「いま歴史とは何か」のシンポジウムを企画したIHR所長のD. キャナダインによれば、カーの時代は経済史や社会史が伝統的に歴史学の主流であった政治史を片隅に追いやり、歴史的事実の因果関係の分析が社会科学を援用しながら展開した時期でもあった。さらに歴史学は現在をよりよく理解するだけでなく、未来を変える力を持つものでもあると考えられていた⁴。

一方、1950年代から60年代には19世紀的な素朴な史実実証主義とは別の形で、歴史的な客観性が主張されるようになった。アナル派は第2次世界大戦以前ルシアン・フェブルやマルク・ブロックらの主導によって形成されたフランスにおける歴史研究の一潮流であるが、この時期には経済学や地理学などの方法を動員し、歴史データの数量化によって時系列データにもとづく客観的な歴史像を形成しようとした⁵。数量化の歴史こそが科学的であるとするル・ロワ・ラデュリを代表とするこの時期のアナル派は、農業生産性、人口変化、農産物価格の数量的変化を取り上げ、歴史地理学と歴史人口学とを組み合わせ、長期的な構造の変動を理解しようとした。

イギリスではP. ラスレットを中心とした、いわゆるケンブリッジグループが歴史データ数量化の担い手となった。彼らは人口の長期的なデータを教区史料などから復元して、こうした数値にもとづく仮説モデルや理論化によって記述し、社会構造の変化を解明しようとした⁶。一方、アメリカでは

³ E. H. カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』（岩波新書、1962年。原著は1961年）6～14頁。

⁴ D. キャナダイン「序文」、前掲『いま歴史とは何か』iii頁。

⁵ R. J. エヴァンズ（今関恒夫ほか訳）『歴史学の擁護』（晃洋書房、1999年。原著は1997年）29頁。また二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』（木鐸社、1986年）10～11頁。

⁶ 斉藤修編著『家族と人口の歴史社会学』（リポート、1988年）14～15頁。

経済学のモデルを前提として、専門的科学としての歴史学が史料の数量化を基礎に推進される。アメリカの数量化された新しい歴史学は、とりわけ経済史と結びつき、ピラミッド型組織の研究チームによって実施される大量データのコンピュータ処理を特徴としていた。こうした流れを代表していたのがR. フォーゲルであり、彼はS. エンガーマンとともにアメリカ南部の奴隷制の収益性の高さを論証しようとした研究を発表して注目を浴びることになった。経済学的方法と客観的な数量データのコンピュータ処理にもとづくこうした研究は科学としての歴史を標榜したが、他面で反証不可能なデータ処理の手法に強い批判がおこなわれ、同時に成長志向と消費中心主義のイデオロギーに取り込まれているという批判にさらされることになった⁷。これらの「新しい歴史学」はいずれも、その多くが広範に利用され始めたコンピュータを用いて歴史上のデータを数量的に処理し、経済学や社会学などを援用して「科学としての歴史」を前面に押し出そうとしたものであった。

しかし、1970年代も終わりに差し掛かると、これらの「新しい歴史学」「科学としての歴史学」に対する批判も同時に強まってくるのである。ローレンス・ストーンは1979年「叙述の復活 - 新しい旧歴史学の影響」という論文を『過去と現在』誌に発表している⁸。この論文で彼は、「科学的歴史」としてマルクス主義にもとづく歴史、フランスのアナール派による環境・人口モデル、そしてアメリカの数量経済史（クリオメトリクス）をあげている。マルクス主義は1950年代の終わりには「科学的歴史」の看板を下ろしつつあったが、これら三つのグループは、歴史の推進力が、人口と食糧供給の関係、生産手段の変化と階級闘争など、物質的な条件であるという信念に支えられている分析的な歴史学であり、経済もしくは人口が主要な決定要因とされた。こうした歴史研究では、アナール派によく示されるように、経済や人口、社会的構造が規定的であり、文化や思想、政治の領域はその反映であると考えられ、分析的、構造的なアプローチが主流となっていた。

ストーンによれば、1970年代になるとこうした状況への反発が強まり、叙述的な歴史の復活が見られるようになる。歴史的な変化の原因として、文化や個人の意思の重要性に対する認識が高まったこと、イデオロギー的論争が沈静化して「大きな何故という問い」を歴史家が発しなくなったこと、そして政治的軍事的な力による社会構造への影響を重要視する傾向が強くなったことなどによって、歴史的な説明の経済決定論的モデルに対する幻滅が広がった。また多種多様な歴史データを単純化して数量化することが、客観的な資料として信頼に足るものであるかどうかといった点も、問題とされるようになった。この結果、数量化によって得られる単一原因から歴史的な説明をおこなうことが疑問視され、むしろM. ヴェーバー的な「選択的親和性」にもとづくフィードバック可能な歴史的説明のモデルのほうが、よりよい手法と見なされるようになった。このようにストーンは数量化を基礎と

⁷ G. イッガース（早島瑛訳）『20世紀の歴史学』（晃洋書房、1996年。原著は1993年）44～46頁。

⁸ L. Stone “The Revival of Narrative: Reflections on a New Old History” *Past and Present* No. 85 (Nov., 1978) pp.3-24.なお、草光俊雄「歴史は文学か科学か」草光俊雄ほか編『英国をみる』（リポート、1991年）67～82頁をも参照。

する「科学的歴史学」に対する揺り戻しが起きていることを指摘しながら、家族、親族、共同体といった非エリートを含むさまざまな社会集団に関する研究、また「心性」に関する研究や文化人類学的研究と結びついた形の叙史的な歴史の復活が進行していると指摘したのである。こうした指摘に対しては、E. ホブズボームが「大きな何故という問い」を歴史家が発しなくなったわけではないと批判し、またマルクス主義にせよアナル派にせよ、社会的経済的要因を歴史的決定要因としてみる考えは、第2次大戦後2～30年間における「新しい歴史学」の大きな成果であるという反論を直ちに寄せている⁹。

とはいえ、ホブズボームの批判にもかかわらず、経済決定論的な歴史研究とは異なる新たな歴史学が育っていたことは明らかである。アナル派では歴史の数量化とともに、数量化の背後にある長期的な持続性とその深層にある「こころ」と「からだ」から構成される人間の身体性についても歴史の対象として検討されていたのである。健康や疾病、衣服、住居、食事など体をめぐる状況が歴史学の対象となり、その一方で時間や空間、生・死などに関する心の動き「心性」をも探ることになった¹⁰。非エリートへの着目、日常的で社会的な生活への関心は多様な人々の主体性を尊重するものであり、中央集権的で直線的な発展史観を相対化するものであった。

新しい日常史、文化史はミクロ的な世界へ注目する新たな歴史学の方法であり、「ミクロ・ストリア」とも呼ばれる。それまでの国家などを扱うマクロ的な社会史が、自分の国や民族中心の側面を持っていたのに対して、ミクロ・ストリアは文化人類学との親近性をもちながら、特定の民族的価値から自由であった。伝統的な歴史学では文書解釈において研究対象との心理的共感が可能であるという前提で組み立てられていたのに対して、新しい社会・文化史はその断絶を強調し、過去を他者として位置づける人類学的方法に立脚していた。したがって、自らの民族との歴史的連続性や一体性を前提とする史料解釈は否定され、さまざまに多様な文化が同等の価値を持つものとみなされることになった¹¹。

しかし、日常的で多様な人間の生活に着目することは、社会史研究の分散と細分化とを引き起こすことになった。アナル派は過去の歴史総体、「全体史」の形成を標榜していたが、1980年代になるとこの構想は著しく崩れていく。また、直線的な発展史観の相対化は伝統的なマルクス主義や経済発展論にもとづく近代化論への拒否反応へもつながることになった。こうして今回のコーフィールド教授の講演の前提となる、歴史学のなかでの「大きな歴史像」の解体といってよい状況が現れてきたのである。

一方、1970年代の半ばから国民国家や国民文化を機軸にすえ「市民革命」などの歴史的な事件の重要性を追求する近代歴史学に対して、異議申し立てが提起されるようになった。ことにイギリス史

⁹ E. ホブズボーム『ホブズボーム歴史論』（ミネルヴァ書房、2001年。268～270頁。この論文の初出はE. Hobsbawm, "The Revival of Narrative: Some Comments" *Past and Present* No. 86 (Feb., 1980) pp.3-8.

¹⁰ 二宮宏之、前掲『全体を見る眼と歴史家たち』37～38頁。

¹¹ イッガース、前掲書、93～95頁。

のなかで修正主義と呼ばれるこれらの研究では、かつての「大きな物語」を否定して歴史の偶然的な状況の重なり合いの重要性が指摘され、逆に指導的な思想や階級の役割ははるかに軽いものされた。例えば、ジョン・モリルやコンラッド・ラッセルのイギリス革命史研究におけるように、実証研究にもとづいて社会構成体に議論を還元する論法を否定し、政治の自立性を主張する。こうした考えに従えば、ピューリタン革命は社会構成体の矛盾から展開していったのではなく、むしろチャールズ1世の非社交性や無定見といった資質、短期的なまた偶発的な状況の重なり合いによって展開されたと考えられるのである¹²。

「修正主義」という用語はイギリス史のなかでも多様な意味を含むので、モリルらのような伝統的歴史学の解釈に対する批判だけをさすものではない¹³。しかし、こうした形の批判修正がおこなわれたことには、歴史過程を生産関係や社会構成に還元するマルクス主義的な歴史観に対する批判を含んでいることは明らかである。しかし、単にマルクス主義に対する批判にとどまらず、経済成長論的な近代化論、より広い意味で社会を一定の方向へ向う進歩・発展として仮定する経済史を中心とする歴史観に対する批判ともなっているのであり、アナール派の新しい社会史などとともに「大きな歴史像」の否定につながるものであった。

1960年代末になると欧米の歴史学は、まったく別の角度からの批判にさらされることになった。その淵源はスイスの言語学者ソシュールにさかのぼることができるが、より直接的にはロラン・バルトやジャック・デリダあるいはヘイドン・ホワイトらによるものといえよう。こうした角度からの批判を整理したエヴァンズによれば、デリダにとって全ては言葉の組み合わせに過ぎず、全てのものは「言説」ないし「テキスト」であり、過去もまた一つのテキストとなっていくものであり、過去を再構築できるという歴史家の考えは見せかけとなり、歴史的な客観性というものは幻想の所産ということになる。つまりテキストは言葉の集合体であり、その言葉も人間が恣意的に作り上げる過程を通じてしか誕生しないのであるから、歴史家はテキストを読むたびにそこに意味を注入する。したがって歴史家が書いたものは歴史家の発明によるものであり、それは過去の客観的表象ではなく、過去は本質的に回復不可能なものとなるのである¹⁴。つまり歴史叙述と文学とは区別できないのであり、また歴史と歴史哲学との間に本質的な相違は存在しないことになる。

こうしたいわゆる「言語論的転回」と呼ばれるポスト・モダニズムの立場からの歴史学への批判は、歴史叙述をフィクションと同等のものとしただけにその影響は決して小さくなかった。特に極右的な政治勢力によるホロコーストを否定する言説を生み出すにいたってのその影響は深刻なものとなった。過激な懐疑主義と相対主義を極端に推し進めたポスト・モダニズムからの批判は、歴史学における客観性を否定し歴史学の存在意義に大きな疑問を投げかけたのであり、強い衝撃を与えたことは間

¹² 近藤和彦「『イギリス革命史』の変貌」『思想』964号、(2004年8月)42～51頁。

¹³ 岩井淳、指昭博編『イギリス史の新潮流』(彩流社、2000年)を参照。

¹⁴ エヴァンズ、前掲『歴史学の擁護』77～79頁。また、エヴァンズ「プロローグ」キャナダイン編、前掲『いま歴史とは何か』9頁をも参照。

違いない。しかし、他方で穏健なポスト・モダニズムが、主としてマルクス主義的な経済決定論が陥っていた行き詰まりから脱却する可能性を示していた点を評価すべきであるとする指摘も存在している。つまり、近代主義的な歴史学の中核にあった理性と進歩への信仰を拒否し、非合理的なもの、異常なもの、逸脱したものなどを歴史的な視野に取り入れることを可能にし、歴史を文学の一形態として取扱うことで、叙述としての歴史の復活を図ることを可能にしたのである¹⁵。その意味で、ポスト・モダニズムの影響は新しい社会史の流れやローレンス・ストーンが指摘する「物語の復活」と同一の平面上にあると見なすこともできる¹⁶。

確かに、古文書館でほこりをかぶった文書史料と取り組み格闘している歴史家には、ポスト・モダニズムの影響はわずかなものであったと思われる。とはいえ、E. H. カーが『歴史とは何か』を書いた1960年代の初頭から約半世紀を経過する間に、欧米の歴史学をめぐる状況は、ここまでに見たように大きく変化した。現在の欧米歴史学のおかれた状況は、ポスト・モダニズムと言語論的展開にも関わらず、一定の学問的な手続を前提にしたうえで過去を再現することが可能であるという共通認識に立ち、しかしその視野は、かつてのエリート中心で西欧中心の歴史から大きく拡大する方向を示している。他方、E. H. カーが前提としていた社会科学にもとづく進歩的な歴史観は大きく後退し、日常的で周縁的な存在に対するミクロ・ストリアへの関心が高まり、歴史研究の分散化・細分化を進行させている。その意味で、歴史叙述の方法としての物語性が回復したからといっても、大きな歴史像はますますその影を薄くしてきている。こうした状況が今回のコーフィールド教授の講演とその背景をなす近著執筆の大きな動機となっていることは間違いない。またこのような欧米の歴史学をめぐる状況は欧米に限定されるものではなく、日本の状況とある程度重なり合う側面を持っている。そこで次節では日本における歴史学をめぐる状況を概観し、コーフィールド講演が日本にとってどのような意味を持つかを考える素材としてみたい。

3. 戦後の日本歴史学と「大きな歴史像」

日本の歴史学は重野安繹らを中心とした帝国大学国史学科の設置（1888年）、翌年の史学会の設立などによって近代的な歴史学の歩みを始めたといつてよいであろう。こうしたアカデミズム史学の立

¹⁵ エヴァンズ、前掲『歴史学の擁護』191～192頁。

¹⁶ もっともストーンは言語論的転回そのものにはきわめて批判的である。『過去と現在』誌にはストーンの批判的立場を中心にポスト・モダニズムと歴史学に関する論争が掲載された。P. Joyce, C. Kelly, "History and Post-Modernism 1, 2" *Past and Present* No.133 (Nov., 1991) pp. 204-213. およびL. Stone, G. M. Spiegel, "History and Post-Modernism 3, 4" *Past and Present* No. 135 (May, 1992) pp. 189-208. なお、これらの論争は『思想』838号（1994年4月）の「歴史学とポストモダン」という特集のなかで、翻訳、掲載されている。こうした論争を見る限り、過去の再現は不可能であるという極端なものは別として、史料をより詳細に検討し、史料の背面に隠されたものにも眼を向け、歴史を再構成することが可能であるという方向に歴史学全体としては、向っているように思われる。

場は中国（清）や日本（国学）の伝統のなかにある実証主義の流れとランケ流の西洋歴史学を組み合わせたものであった¹⁷。一方、20世紀に入るとマルクス主義を中心とする社会主義思想の流入が始まり、社会主義革命を目指す運動とつながる経済史を中心とする歴史学を発展させ、1930年代には明治維新の性格や地主的土地所有に関わる論争を引き起こした。しかし、日本における軍国主義の高まりは皇国史観という超国家主義的イデオロギーにまみれた歴史学を生み出し、アカデミズム史学もマルクス主義の影響を受けた歴史学ももるとともに窒息させられていく。

1945年の日本の敗戦は、皇国史観のよって立つ基盤を崩壊させ、戦後の歴史学は再び実証的なアカデミズム史学とマルクス主義歴史学の二つによって再建され、ことに後者の影響の強く現れた、いわゆる戦後歴史学が形成されることになった。敗戦という歴史的な出来事を出発点として形成された戦後歴史学は、敗戦という悲惨で衝撃的な事態に日本社会を導いた過去の解明が課題とされ、その解答は「近代の逸脱」という視点からしばしば試みられることになった¹⁸。正常な近代社会の形成からの逸脱が、敗戦という悲惨な結末に至る原因であって、幕藩体制から始まって明治維新そしてファシズムへとつながる連続性のなかで、社会的、政治的構造の非近代的な特質からこれを説明しようとしたのである。

こうした観点からの歴史研究にとって、マルクス主義を中心とした社会科学への接近は自明のものであった。戦後歴史学を代表する歴史家の一人である遠山茂樹が「社会構成の問題に答えていない見解は、どういう結論であろうとも、研究の発展に逆行する非科学となる¹⁹」と述べているのはその端的な現れであろう。このような状況は、日本でも歴史研究における社会科学の影響が極めて大きくなったことを示しており、E. H. カークが『歴史とは何か』で述べた状況とある程度の類似性を見ることができ、日本の場合、社会科学としてマルクス主義がアカデミズムの世界を含めて大きな影響を持ったことが特徴的である。

一方、日本の敗戦を近代からの逸脱として捉える見方は、同時に正常な発展型としての西欧、とりわけイギリスの経済発展を対象とし、マルクスとM. ヴェーバーの方法とを結びつけた大塚久雄らによる西洋経済史研究をも生み出している²⁰。大塚は「明治維新以降、わが国における経済発展（いわゆる日本資本主義）の特質を理解するために必要な座標を世界史的規模において正確に設定したい²¹」と述べており、ここで設定された座標軸が西欧を基準とする近代化であったことは間違いない。マルクス主義の影響や「近代からの逸脱」に日本社会の構造的な歪みを見出すなどの点で、大塚を中心とする経済史研究も広い意味で戦後歴史学のなかに含まれるとってよいであろう。しかし、マルクス主義の影響をより強く受けた陣営は、大塚の経済史を、マルクスやレーニンの理論に忠実でないとい

¹⁷ 鈴木淳「史学の本分」前掲『歴史学の最前線』50～51頁。

¹⁸ C. グラック（梅崎透訳）『歴史で考える』（岩波書店、2007年）62頁。

¹⁹ 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』（岩波書店、1968年）19頁。

²⁰ 道重一郎「大塚久雄と松田智雄」住谷一彦ほか編『歴史への視線』所収（日本経済評論社、1998年）を参照。

²¹ 大塚久雄「緒言」大塚久雄編『西洋経済史講座』第1巻（岩波書店、1960年）4頁。

う観点から、「近代主義」というレッテルを貼り批判した。他方、矢口孝次郎や角山栄らは実証的な観点から大塚を批判しようとしたが、彼らにおいても経済発展の基本的図式はマルクス主義によるものであった。

大塚を中心としたグループが『西洋経済史講座』全5巻（岩波書店、1960～62年）を刊行し始めた1960年には、矢口や小松芳喬ら大塚のグループとはやや異なる人々を中心として編集された『社会経済史体系』全11巻（弘文堂、1960年）が刊行され、経済史研究のピークを迎えるが、こうした経済史研究の基本的な考えは、歴史をマルクス主義の影響のもと社会科学の一部として捉え、正常な＝近代的な発展の姿を追求しようとしていたものであり、その点ではどちらも同一の基盤に立っていたものと思われる。西洋経済史の領域においては、1960年代後半になってアメリカ流の経済成長論を基礎とした「近代化」モデルの流行が始まり、角山栄がロストウの成長史学の紹介を図るといった場面が現れ、「近代からの逸脱」といった観点からの変化が始まるが、いずれにしても「近代」社会への発展モデルを中心とした分析的な歴史研究の枠内にあることには変わりはない²²。

西洋史、特にイギリス史研究では1971年に「近代イギリス史の再検討」と題されたシンポジウムが開かれたが、そのなかで松浦高嶺は「あるべき近代化の典型」としてのイギリス史像を否定し、「近代化」という基準そのものについても疑問を呈している²³。しかし、他方で松浦も社会科学としての歴史学の方法は維持されているし、「近代化」に替わるものとしては「成長」が例示としてではあるが、あげられている。その点で言えば松浦の主張は、「近代化」を志向する戦後歴史学の解体を予見させるものを含んでいたが、広い意味でなおその枠組みのなかにとどまっていたといえるだろう。

しかし、現在の時点から見ると1970年代はやはり戦後歴史学の転換点であったといえよう。70年代の後半にはヨーロッパにおけるアナル派など社会史の動向が二宮宏之らによって紹介され始める²⁴。グラックの整理に従えば、こうした新しい歴史学は、外国史研究者という日本の歴史学のなかでのアウトサイダー、外部者からもたらされたものであったので、その衝撃は決して大きいものではなく、「歴史学的方法的な基盤を崩壊させたというよりも、それを豊かにしたというべきであろう²⁵」という程度にとどまった。日本史においても網野善彦による『無縁・公界・楽』の初版が1978年に刊行されている²⁶。また、1982年に創刊された雑誌『社会史研究』の編集同人には二宮のほかドイツ史の阿部謹也、社会思想史の良知力、人類学の川田順造らが参加しているが、日本史関係の研究者は

²² 道重一郎「序説 戦後社会経済史学の展開と本書の位置」道重一郎・佐藤弘幸編『イギリス社会の形成史』（三嶺書房、2000年）6～7頁。

²³ 松浦高嶺「イギリス近代史における『実体概念』と『整序概念』」柴田三千雄・松浦高嶺編『近代イギリス史の再検討』（御茶ノ水書房、1972年）178～179頁。

²⁴ 二宮宏之、前掲『全体を見る眼と歴史家たち』を参照。同書の論考の主要な部分は1970年代の後半から80年代の初頭にかけて発表されたものである。

²⁵ グラック、前掲書、102頁。

²⁶ 網野善彦『無縁・公界・楽』（平凡社、1978年）

一人もおらず、執筆者のなかに網野が加わっているのを見る程度である²⁷。したがって日本史を研究の中心にしている研究者の大部分にとって社会史研究はなお周辺のなものにとどまっていたと考えることができる。

大塚久雄の経済史や思想史に関する研究を丸山眞男の政治学や川島武宜の法社会学などととも「戦後啓蒙」と位置づけるならば、その系譜に属する長幸男や内田芳明などを中心として編集された雑誌『経済と社会』が『社会史研究』と同時期の1982年に創刊されている。この創刊号には巻頭を大塚久雄と内田義彦との対談「社会科学の形成」が飾っているが、興味深いことにこれに続いて荒川幾男「ミシェル・フーコーと歴史」、丸山圭三郎「ソシユール」という論考が掲載されている²⁸。ポスト・モダニズムと言語論的転回が欧米の歴史学に衝撃を与えつつあったのとほぼ同時期に、日本でもこうした思想動向の紹介が試みられている。しかし、これらの紹介はあくまでも思想史の枠組みのなかにとどまっており、この雑誌のその後の内容においても歴史学からの応答は見られない。

成田龍一は社会史などの新しい歴史学の影響が1980年代に強まったことは認めながらも、80年代は「まだ従来の歴史学が主流をなして」おり、戦後歴史学の問題意識と成果とを継承しようとしていた時期であるとしている²⁹。戦後歴史学主流が大きく動揺することになるのは、1989年以降の冷戦構造の崩壊、ソ連の解体による衝撃によるものと考えられる。経済史を含めて外国史研究においては、すでに見たように新しい歴史学の影響はかなり拡大していたが、日本史研究を中心とした戦後歴史学においてはこうした動向が影響を及ぼすまでかなりの時間と外部的な衝撃が必要であった。しかし、ここで戦後歴史学が直面することを余儀なくされたポスト・モダニズムのもたらした課題はきわめて大きいものであった。19世紀以降の歴史学がもっていた進歩史観は、マルクス主義的な弁証法にもとづく発展図式を含めてその基礎が大きく揺らいでいた。進歩史観の後退は西欧近代そのものを相対化することであり、ヨーロッパ中心の歴史、そこから生み出された「近代」の優越性の否定につながった。戦後歴史学がもっていた「歪められた近代」という、理想化されたヨーロッパ近代ことにイギリスのそれを基準として、そこからの歪みと逸脱に近代日本の持つ問題性を抽出していくという方法は、その基準を失うことによって潰えたことになる³⁰。

欧米において強い衝撃を与えた言語論的転回という認識論上の新しい動きは、近代の相対化に比べ、日本の歴史学に与えた影響は小さかったように思われる³¹。理想的近代化に対する歪みのなか

²⁷ 阿部謹也・川田順造・二宮宏之・良知力(編集同人)『社会史研究 創刊号』(日本エディタースクール出版部、1982年)。なお、この雑誌は1988年の第8号まで続いた。

²⁸ 長幸男ほか編『歴史と社会 創刊号』(リポート、1982年)。なお、この雑誌は1986年の第7号まで同一の形で刊行された。

²⁹ 成田龍一「総論 歴史意識の80年代と90年代」歴史学研究会編『歴史学における方法的転回』(青木書店、2002年)286～288頁。

³⁰ グラック、前掲書、106～108頁。

³¹ 言語論的転回を含めて、新しい歴史学に対する日本史研究の側の受止め方をバランスよく整理したものとして、安丸良夫「表象の意味するもの」前掲『歴史学における方法的転回』228～243頁を参照。

に日本社会のもつ問題の原因を見定め、望ましい日本社会の像を近代化過程のなかに描こうとした歴史学は、望ましい近代の姿をさまざまな形で追求してきた。マルクス主義的な市民革命論ばかりでなく、経済成長論的な近代化論も含めて、「科学的な歴史」はそのいずれもが「近代」への発展を当然のものとしてきた。70年代後半から紹介され始めた、社会史を中心とする新しい歴史の導入も、民衆史などを中心に歴史研究を豊かにするものとして可能だったといえよう。しかし、その後の、マルクス主義的な歴史認識の影響力の後退、単線的発展論の否定、国民国家の相対化、社会史的な研究テーマの細分化といった状況が、「近代化」という大きな歴史、グランド・セオリーを突き崩すことになった。

1990年代は冷戦構造の崩壊とマルクス主義の退潮が決定的となった時期である。その意味で戦後歴史学によってたつ近代社会の形成、社会構成体の移行論はその前提を失った。20世紀後半に強い影響力をもった大きな歴史像がその根拠を失いつつある状況のなかで、歴史研究は、多様なテーマを包摂する社会史の拡大や言語論的転回の影響を踏まえて、新しい方法を築くべき時期に入っていることは明らかである³²。こうした状況のなかで、改めて「大きな歴史像」がなぜ必要なのか。またその再構築は可能なのか。コーフィールド教授の講演はこの点で、日本の歴史学にとっても有益な示唆を与えるものとなるように思われる。

4. 「大きな歴史像」への回帰

以下においては、コーフィールド教授が東洋大学でおこなった講演およびこの講演の前提となった同教授の近著の内容を簡単に紹介することにしたい。コーフィールド教授は、中野忠早稲田大学教授を研究代表者とし、「18世紀イギリス都市における市民的社交圏 - 地域社会、消費文化、貧困」をテーマとする科学研究補助金にもとづく研究グループの招聘に応じて来日し、教授を中心とする何回かの研究会及び講演会が開催された。コーフィールド教授はイギリスにおける都市史研究の第一人者であり、またイギリス史における「長期の18世紀」(ほぼ1640年代から1830年代)を一つの時代として、社会、経済、文化などさまざまな角度から検討し、すぐれた研究成果をあげている第一線の研究者である³³。

講演全体のテーマとしては、「英国と近代性」Britain and Modernityというタイトルが設定され、具体的には三種類の講演がおこなわれた。第1の主題は「プロト民主主義」Proto-Democracyと題さ

³² 言語論的転回以降の歴史学の方法について、これまでアナル派などを先駆的に紹介してきた二宮宏之が、きわめてまとまった整理と方向性を示している。二宮宏之「歴史の作法」二宮宏之編『歴史を問う4 歴史はいかに書かれるか』(岩波書店、2004年)1～57頁を参照。

³³ コーフィールド教授の代表的な著作として、坂巻清、松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃 1700 - 1800』(三嶺書房、1989年。原著は1982年)が翻訳出版されている。

れ、18世紀のロンドン、ウェストミンスターなどを中心とする投票行動の分析を基礎として、イギリスにおける議会制民主主義の原初的な様相を分析したものである。第2の主題は「時代を名づける」Naming the Ageと題され、18世紀のイギリス人が自らの時代をどのように呼んだかの分析から、時代意識と彼らのアイデンティティが問題とされた。

東洋大学で5月23日におこなわれた講演は第3の主題を扱ったものであり、「歴史家と大きな歴史像への回帰」Historians and the Return to the Big Historyと題されていた。コーフィールド教授はイェール大学出版局から2007年に『時間と歴史の形成』*Time and the Shape of History*という著作を公刊したばかりであり、この講演は同著作を下敷きにしたものである³⁴。

講演はまず近年歴史家がその専門領域を細分化させながら、長期の歴史から遠ざかっている現状の改善が必要であると指摘するところから始まる。専門領域の細分化は歴史教育の指導体制によって起こっている点もあるが、研究対象をより厳密に研究しようとする現れでもあり、それ自体は非難されるべきことではない。専門化が生み出した新しい研究領域の拡大 - ジェンダー史や環境史など - は、むしろ歴史研究を豊かにするものでもある。しかし、同時に新しいより大きな見取り図をも作成する必要があり、時代をバラバラに断裂したものと見なすポスト・モダニズム理論が崩壊しつつある今日、より大きな歴史像を創り出す絶好の機会であると同時に指摘するのである。つまりアナル派などの影響を受けながら、新しい歴史学によって日常史、文化史の領域が拡大したことを、研究テーマの細分化が起こっているとはいえ、むしろ肯定的に評価している。その一方で、ポスト・モダニズム理論に対してはきわめて否定的な姿勢を示し、この理論の影響力は失われたものと断定し、連続的な歴史を強調しながら大きな歴史像の再生を目指すべきであるとしているのである。

ではなぜ大きな歴史像が必要なのであろうか。その理由については、この講演の最後に持ち越されており、その前にいくつかの大きな歴史像が影響力を失っていった姿を示している。まず、A. トインビーの『歴史の研究』を大きな見取り図の代表例として取り上げる。21の世界の諸文明の盛衰を試練とそれへの対応として描き出したトインビーの歴史像は、一時期非常に大きな反響を呼んだが、今では振り返るものもない。こうした大きな物語の衰退原因は、野蛮から文明への直線的な進歩に対する信頼の消滅であり、今日では普遍的な進歩を信ずるものがいなくなったからであると、進歩史観の消滅というポスト・モダニズム以降の歴史意識の変化が、大きな歴史像の衰退につながったという点を指摘している。複雑な人類の歴史について、その全体的な姿を叙述するのは困難ではあるが、その一方で、大きな歴史叙述、歴史物語に対する大衆的な願望がイギリスにおいても広く存在している。確かに国王や女王、英雄の歴史は大衆的な人気があり、それに応じようとしてテレビのプロデューサーは単純な画像を求め、歴史家が提示しようとする複雑な歴史の姿との間には大きな溝が生じて

³⁴ 講演に関する以下の要約は、コーフィールド教授が帰国後改めて講演内容を活字にして送付してきたものを元におこなう。なお、この内容は改めて翻訳公表される予定である。また著書は、P. Corfield, *Time and the Shape of History* (New Heaven & London, 2007) である。

しまうのである。

次に、コーフィールド教授は歴史研究における段階論という発想のもつ功罪を検討している。段階論は歴史をいくつかの時代に分けて説明しようとする方法であり、事態が進展する道筋、展開を明らかにしてくれるものであり、国や地域の比較の観点を導入すれば先進・後進の区別を生むことにもなる。他方で、段階論はその段階設定が恣意的になりやすく、歴史の連続性に対する認識が不十分になるという欠点が存在している。しかし、確かにそれぞれの段階の始点や終点を明確に規定する客観的な基準は存在していないが、歴史過程のすべてを相対化することはできない。連続的な歴史の全体を比定するためには、何らかの基準が必要であり、そのために段階論は有効であるとコーフィールド教授は指摘している。

一方、進歩史観の消滅と並んで、大きな歴史像への関心が小さくなった原因として、マルクス主義的な発展段階論の衰退が指摘される。しかし、さまざまな段階論が存在するなかで、マルクス主義による段階論は比較的高く評価されている。評価が高い理由は、マルクス主義の段階論が歴史上の諸段階を経済学的に規定し、それぞれの段階における生産様式内部の矛盾から歴史的な変化を説明しており、歴史発展のための推進力が理論的に組み込まれている点にある。けれども、人類の複雑な歴史的発展をわずかな段階へと簡略化することは大きな困難をともなっており、スターリンによる公式化に対する異論も次々と提案された。だが、さまざまな段階規定の提示は革命理論としての体系性を弱体化し、革命の必然性を脆弱なものに変え、革命が偶発的なものになってしまう危険を含んでいた。そこで、スターリンは異論をことごとく排除することになったのであると、コーフィールド教授は考えている。

西欧のマルクス主義歴史家はより柔軟に歴史的变化と向かい合ったが、この結果、封建制から資本制への移行の画期においてすら一致を見ていない。その上、例えばマルクス主義的なフェミニズム史研究者は、封建制のもとでの女性としての性格と近代における女性のあり方の間に何らかの進歩を見出すこともできない。今日、マルクス主義に共感をいだいている歴史家であっても、「下からの歴史」に対して強い関心を示してはいるが、古代・封建制・資本制というマルクス主義的な段階図式については議論しなくなっているのである。

歴史全体の展開を見通す上で、かなり有力と思われていたマルクス主義の段階論も現実にはその適用がかなり難しく、大きな歴史像の形成はやはり困難なものに見える。しかし、歴史の不確実性を強調したポスト・モダニズム理論に説得力がなく、異なったテーマを取扱う歴史家の間に相互に話し合うための基礎として大きな歴史像が必要なのである。最後に「大きな歴史像」の必要性という点についてコーフィールド教授は、人間の歴史全体を見通すことのできる共通の基盤の存在が必要であることを強調する。その上で連続性・緩慢な変化（マイクロ変化）、そして基底的な転換（マクロ変化）の三局面で歴史を見ていくことを提案して講演を終えている。

このように講演そのものは、「大きな歴史像」を形成することの困難性と、それにも関わらずその必要性を強調するものであって、「大きな歴史像」を作るための提案そのものの具体的な説明は省か

れている。そこで、コーフィールド教授の近著の内容で、これを若干補っておきたい。『時間と歴史の形成』と題されたこの著作では、講演と同様に、個別の歴史研究の前提として異なったさまざまな専門領域の歴史家が、共通して議論できる土台としての歴史形成に関する理念の必要性を提起し、幅広い歴史認識を検討したうえで、教授自身の「大きな歴史像」形成に向けた積極的な提案をおこなおうとしている。

まず出発点として、共時性 - 同時期の空間的広がりと相互作用 - と、通時性 - 長期にわたる時間の流れ - の結合として歴史全体を認識する必要が指摘される。続いて時間の問題が、その非対称性と相対性といった特質についてアインシュタインに言及しながら、宇宙的な時間の流れなどとともに検討され、さらに歴史のもつ連続性、持続性という特質が科学、文化、習慣、社会構造など多岐にわたって論じられる。そのなかで長期にわたる持続のなかに潜むミクロ的な変化の存在が指摘され、ここにコーフィールド教授の提起する枠組みの2つの局面が登場する。

変化の問題が次に正面から取り上げられる。変化のなかでは、まず進化的なゆっくりとした漸進的な変化と革命的で構造的なマクロ変化の相違が区別される。そのなかでミクロ変化は直線的ではない複雑な発展の動きであり、累積的なミクロ変化が転換の決定的な力となりうるが、その多様性が歴史の不確実性をもたらすことにもなる。他方で、マクロ的で革命的な変化は、急激で断絶性をもつ転換点を示す位置にあるが、同時代においてはその評価は過大視、もしくは過小評価される傾向がある。コーフィールド教授は「人類の月着陸」と「スプートニク」とを対比させ、前者の評価が一般的に高いけれども歴史的には後者のほうが転換点としての重要性があると指摘して、この傾向を例示している。また、マクロ変化のなかにある革命としての性格は、マルクス主義的な意味での階級的な衝突という側面を失ってはいるが、持続性の破壊と新たな持続性の始まりであり、ミクロ的な変化とは本質的に異なるものである点が強調されている。

ここでコーフィールド教授は「近代」の概念を再検討する。その一つの目的はポスト・モダニズムに対する批判である。ポスト・モダニズム理論は近代化論的發展、マルクス主義的發展を否定し、因果論を否定して偶然性を強調する議論であると整理した上で、ポスト・モダニズムの批判する「近代」の概念そのものが多様で複雑であり、この議論のもつ脆弱性を批判している。さらに測りきれない時間の長さのなかに重要なパターンを発見して、歴史全体を結び合わせることは大きな知的挑戦であり、無意味な断片化へ陥ることなく多様性を認識することになると主張している。コーフィールド教授にとっては、こうした歴史上のパターンの発見と解明にとって、段階論的な認識はきわめて重要なステップになると思われる。そこでこの著書では次に、段階論が分析されている。段階論についての説明は、ほぼ講演で語られた内容と重なっているが、数世紀にわたる変化の過程を説明し、中心となる時代の特質を説明することができるという魅力がある一方で、持続性やミクロ変化を過小評価する傾向を内包していることに問題があるとされている。

このように段階論はある程度その役割を評価することができるが、単線的な段階のなかに歴史を押し込めてしまうことは誤っているのであって、複線的で多様な歴史の変化が重視される。そのなかで

F. ブローデルの三層構造が俎上にあげられて、批判の対象となっている。アナル派の代表的な歴史家の一人であるブローデルは歴史を、最も下層にある長期の持続的な層、経済や国家、社会といった領域からなる多様な要素の結合と変動の層、個人の活動や事件からなる最上層の三層の構造で把握しようと考えた³⁵。ブローデルの考えには、変わらない時間＝持続性を重視する歴史観や三つの層から歴史を捉えようとする方法など、コーフィールド教授の提起する方法論と類似する側面をいくつか見て取ることができる。これに対してコーフィールド教授も、ブローデルを意識しながら次のように批判している。ブローデルの三層構造のそれぞれについて、まず長期的な持続の層においては地域を越えた歴史的なつながりが説明できず、中層では経済と社会との関係が説明されず、最上層の出来事や事件が登場する層では通時的な観点が過小評価されていると批判している。次に「分離された階層、種類に分けるよりも、継続的に相互作用し、長期的に交差する一連の異なった次元を複雑な一つの時間性のなかで描くことが効果的である。³⁶」としてブローデルの三層構造が各層を分離して取扱っている点を批判している。コーフィールド教授は、ブローデルのように時間の流れのなかに異なる種類が存在するという考えを否定し、時間のもつ一体性や連続性を同時に主張し、また短期的な局面での乱雑で偶然的に見える出来事のなかにもそうしたつながりが存在するとして、歴史のもつ凝集性に強い信頼を寄せている。つまり、「決定論とカオスの間にある狭い小路³⁷」の追求が歴史家には可能であるとするのである。

このような多面的な検討の結果として、持続性とマイクロ変化およびマクロ変化の組み合わせとして歴史を理解し、それらの局面を分解することなく全体として一体のものとして認識することが、歴史研究にとって不可欠であると結論づけている。以上のような『時間と歴史の形成』に関する簡単な要約からもわかるように、コーフィールド教授の講演は大きな歴史認識論の一部であり、特に歴史のなかでの時間の意味づけにおいて段階論、ことにマルクス主義の段階論について、その性格と限界を明らかにすることを、講演の主眼とするものであった。日本の歴史研究にとって、それではコーフィールド教授の講演はどのように考え、位置づけることができるだろうか。最後にこの点について簡単にまとめてみることにしよう。

5. おわりに

コーフィールド教授の「大きな歴史像」とは、専門を異にする歴史家が、議論する共通の基盤のことである。そのための一つのモデルとして、長期の持続的的局面、小さなマイクロ変化の累積、そして短期的で劇的な構造変化の三局面を、分離することなく総合して把握すべきであるという方法を提案し

³⁵ F.ブローデル(浜名優美訳)『地中海 第1巻』(藤原書店、1991年。原著初版は1966年)21～22頁。

³⁶ P. Corfield, *op. cit.*, p.210.

³⁷ *Ibid.*, p. 223.

ている。新しい歴史認識論が提起されるにいたった歴史学をめぐる状況は、ある意味で日本の歴史学がおかれている状況と相似したものである。ローレンス・ストーンが指摘したように、E. H. カークが歴史学のあり方として考えた社会科学に引き寄せた科学的歴史学の方法が衰退し、特にマルクス主義の影響の後退がこのような状況を生み出している。コーフィールド教授は、歴史学のなかでも数量化へ向かう方向が後退した点は、それほど問題としてはいない。しかし、もともとマルクス主義からの影響を強く受けていたことを自認していたこともあり、マルクス主義の衰退から受けた衝撃は小さくないものと思われる³⁸。こうした点はマルクス主義の段階論に対して論述の多くを割いていることから推測できる。しかし、マルクス主義をそのまま維持することができないということも同時に明らかになっている。

他方、70年代以降のポスト・モダニズムの影響も明らかに認められるが、主な論点での反応はきわめて冷淡であり、講演でも示されたようにポスト・モダニズム理論は崩壊したものと規定されている。しかし、「近代」の相対化に関する論点はきちんと汲み取られており、言語論的転回に比べてはるかに重要なものとして位置づけられており、この点でも日本の歴史学の状況と同じような位相が見られる。西欧中心に構成された「近代」の発展として大きな歴史像を描くことはもはや不可能である。確かにイギリス史においては、コーフィールド教授があげているジェンダー史や環境史以外にも、帝国史やブリテン史などさまざまなジャンルの歴史研究が、ポスト・モダニズムの衝撃を受けて成長しており、日本におけるイギリス史研究においてもその影響ははっきり現れている。これら新しい研究の広がりそれ自体は歓迎すべきものであるとはいえ、歴史家同士の共通基盤としての新しい歴史像の必要を、コーフィールド教授は主張するのである。

こうした提案自体は日本の歴史学においても広く認められるであろう。それではコーフィールド教授の提起した「大きな歴史像」はどうであろうか。歴史を三つの局面とその総合として把握している点はブローデルの歴史方法論と類似しているところがある。しかし、コーフィールド教授の主たる批判対象もブローデルなのである。ブローデルのなかにある三層間の厳密な分離を歴史的総合の観点から批判し、階層的なシステムからは歴史の変動局面、マクロ変化を十分に説明し得ないと主張するのである。その点では、コーフィールド・モデルは歴史の持続的な局面を考慮しながら、ミクロ的な変化の累積とマクロ的な構造変化の結びつきによって、人間社会の転換という巨視的で動的な変化を発見し、解明しようとする歴史的モデルであり³⁹、マルクス主義モデルからの継承性を見取することもできる。

新たなモデルの形成にあたってコーフィールド教授は、ヨーロッパに限らずアジアやアフリカ、中

³⁸ コーフィールド教授は筆者との個人的な会話のなかで、自らを「失望したマルクス主義者」disappointed Marxistであると述べている。

³⁹ こうしたモデルは、C.グラックの「社会のミクロな地殻変動を追及し、過去の日常的な小さな行為を近代史の大きな物語を構成するマクロな社会変動と結びつける」という立場との類似性を見ることができる。グラック、前掲書、112頁。

南米などさまざまな文明の時間概念や歴史に対する見方を、その著書のなかで比較検討している。その結果、三局面の構造とその全体的な把握が歴史認識にとって必要であると結論づけている。しかし、三局面の相互関係や具体的な歴史叙述への適応は不明瞭なままである。歴史家が個別研究にのみ専念するのではなく、歴史認識にも十分配慮すべきである、あるいはポスト・モダニズムを超えて多元的で因果的な歴史認識を三局面の総合として理解すべきである、という指摘には、日本の歴史学にとっても傾聴に値するものがある。だが、より具体的なモデルの形成と歴史叙述のなかで、これをいかに生かすかという問題は今後の課題として残っているように思われる⁴⁰。

⁴⁰ コーフィールド教授においては、M. ヴェーバー的に理念型的なモデルを構成しようとする関心は小さい。しかし、発展段階論の欠陥を補いながら、歴史相対主義に陥らないためにもこうした観点も必要になると思われる。この点について、森本芳樹『比較史の道』（創文社、2004年）251～255頁を参照。